

観察対象の彼は
ヤンデレホテル王でした。

Aya & Tomoya

秋桜ヒロロ

Hiroro Akizakura



エタニティ文庫

目次

観察対象の彼はヤンデレホテル王でした。

5

書き下ろし番外編

思い出を切り取る

301

観察対象の彼はヤンデレホテル王でした。

第一章 ヤンデレ社長に囲われました!?

「ああっ！ もうっ！ 今日のレン様も最高にす・て・き」

うっとり息を吐きながら、彩は身悶えた。頬はほんのり熱く、瞳は感極まって湧き出た涙で潤んでいる。

表情だけならばまるで恋する乙女といった具合の彼女だが、その手に持っているものはそれに似つかわしくないものだった。

望遠レンズのついた一眼レフカメラである。

彼女は自室の窓から向かいのマンションにそのレンズを向け、何度かシャッターを切った。

高い鼻梁に薄い唇。中性的で端正な顔立ちながら、輪郭はしっかりと男性のそれだ。黒檀のように艶めく髪の毛はさらさらと風になびいて光に溶けていく。

小気味のいいシャッター音を数度鳴らした後、彩は液晶モニターに映った一人の男性に頬を緩ませる。

そう、彼女、一ノ瀬彩はストーカーである。

自分では『彼の熱狂的なファン』と認識しているのだが、やっていることはストーカー行為そのものだ。相手の家に押しかけたり、情報を無理やり得たりしようとしないうちに、まだましなほうだと思っていた。とはいえライフワークの盗撮も、立派な犯罪行為である。

そんな彼女のストーカー被害にあっているのは、向かいのマンションに住む男性だ。たまたま住んでいる部屋の階数が一緒なのをいいことに、彩は毎朝彼の様子をつぶさに観察し、隙あらば写真を撮っている。

「マジでレン様！ 二・五次元！ いや、あの再現率は二・八次元レベル！ 素敵すぎる!!」

興奮気味にそう言つて、彩はカメラを抱きしめた。

レンというのは、彩が昔から愛読している少女漫画『初恋パレット』の蓬生レンというキャラクターのことである。ヒロインの五十嵐葉をヒーローと取り合い敗れる、いわゆる当て馬的なキャラクターのだが、彩はヒーローより、ライバルキャラであるレンが昔から好きだった。ヒーローとは真逆で冷たく描かれている彼の、時折見せる柔らかな笑顔や、ヒロインのことを想って自ら身を引く潔さは、幼い頃の彩の胸に切なく鋭い棘を残した。

そのレンに彼がそっくりだったのである。

「はあ。まったく、栞ちゃんがレン様を選ばないのが信じられないよ。レン様みたいな彼氏のほうが、絶対大切にしてくれるし、幸せになれるに決まっているのに！ これだから、恋愛初心者は……」

と言う彩の恋愛経験も豊富ではない。

今まで付き合ったことがある人は一人だけで、大学二年生の時だった。

相手は、元々友人で、はやし立てるような周りの雰囲気にならされて付き合い始めた。しかし、その付き合いは所詮友情の延長にしか過ぎず、別れるまでの一年間で二人は一度キスしただけ。なので、彼女も立派な恋愛初心者である。もちろん身体だって誰にも開いたことがない。

『初恋パレット』は結構な人気を誇る長寿漫画で、連載が終わったのち、実写映画やドラマにもなった作品なのだが、出演したとの俳優よりも彼のほうがレンにぴったりだった。

容姿もさることながら、どこか気品溢れる仕草がレンそのものだ。

「あっ！もしかして今から着替え？ いやん」

語尾にハートマークがちらついているような声音で、彩は頬をぽつと熱くした。

もう一度カメラを構え直し、ふたたびレンズを彼の部屋に向ける。すると、向かいの

彼はこちらを一瞬だけ見て唇の端を引き上げ、カーテンを勢いよく閉めてしまった。

「あー……惜しいっ！でもまあ、今日は素敵な横顔が撮りたいいいか」

弾けるような声で発した内容は、どこまでも犯罪めいている。

彩はカメラをしまうと、会社に出勤する準備を始めた。

肩より上で切りそろえた髪の毛に、大きな丸い瞳。一部の友人からは童顔とその髪形から『こけしちゃん』なんて揶揄されている彼女だが、二十六歳のれっきとした大人の女性である。

先ほどまでストーリーカー活動にいそしんでいたのに、悠長にしている時間はない。彼女は手早く身支度をしながら、カーテンの向こうに消えた彼を思った。

「もしかしてさつき、目が合った？ ……いや、まさかね」

カーテンの奥に消える前の彼の視線を思い出し、彩は少しだけ首をひねった。しかし、一方的に熱を上げているだけの彩を、彼が知っているはずがない。

そもそも知っていたら、今頃は警察沙汰になっているだろう。自分のしていることやばさに関して、彩にもそれぐらいの自覚はあった。

時計を見れば、いつも家を出ている時刻を五分ほど過ぎてている。

「あっ！早くしないとレン様と同じ電車に乗れない!!」

焦ってそう言いながら、彩は今日も元気に出勤していくのだった。

「ああああ!! 今朝の電車最高だったあ!! 五メートル先にレン様! シトラス系の香りした! 絶対した!!」

「アンタいい加減にしないと、マジで警察に捕まるわよ……」

昼休憩に入ったばかりの会社の給湯室で悶絶する彩にそうツッコむのは、同僚である堂下香帆だ。モデルばりのスタイルで高身長の彼女は、先ほど淹れたばかりのコーヒーストを片手に剣呑な声を出す。

「家では窓から覗きして、通勤時間は後をつけて……、相手だってそろそろ気づくんじゃないの?」

「今日は別の後をつけてないもん! たまたま同じ電車に乗っただけだもん!」

彩は頬を膨らませながらそう反論するが、香帆はその反論も頭痛の種だと言わんばかりに頭を抱えた。

「嘘つけ! 相手の出勤時間は把握しているんでしょ?」

「愚問を。私が把握してないと思った?」

恥じることなく、むしろ胸を張ってそう言う彩に香帆は反射的に声を上げる。

「そこで自慢げにする意味が分からないわよ! このストーカー女!!」

「えへへ」

「喜ぶな! この馬鹿!」

「わーい」

「……貶されて喜ぶなんて、アンタって相当Mっ気あるわよね」

呆れたのか、疲れたのか。香帆はがっくりと肩を落とし、一つため息を吐いた。

「アンタって、自分の願望に忠実っていうか、面白い人生を送るのに余念がないっていうか……。ほんつと自由人よねー。正直、羨ましいわ」

「そうかな? 自分ではよく分かんないんだけど、皆こんなもんじゃないの?」

「世界中がアンタみたいな人間ばかりになったら、人類なんてすぐ滅亡するわ!」

香帆の言葉に彩は「なんで?」と首をかしげる。そんな彼女に香帆は半眼になり、やがて諦めたようにため息を一つ零した。

「というか、相手がどうい奴なのか分からないのに、よくそんなに熱上げられるわね。もしかしたら変な奴かもしれないわよ。人は見かけによらないんだから……」

「変な奴でも、あの見た目だけで百点満点!」

「……冷たい奴かもしれないわよ?」

「それでもいい!! むしろ冷たいぐらいがレン様っぽくていい!! 最高! つれなくされたほうが追いかけてようって燃えるし、萌える!!」

香帆の言葉に、なぜかガッツポーズを掲げる彩である。

そんな彼女の言動に香帆は頬を引きつらせる。そうして、人差し指を彩の鼻先に押し付けながら、説教じみた声を出した。

「そんなに好きなら、そのハンカチを返すのを口実に連絡先を聞けばいいじゃない。もしたら連絡も取り放題よ。もしかしたら、これをきっかけに付き合えたりするかもしれないし」

香帆は鼻先に当てていた指先を、彩が大切に握りしめているチェック柄の上質そうなハンカチにスライドさせた。

それはかなり前、後をつけていた彩の目の前で彼が落としたものだった。

彩も拾った当初はちゃんと返そうと思っていた。しかし結局声をかける勇気が出ず、今ではお守りのように毎日持ち歩いてしまっている。そのハンカチからも、ほのかにシトラス系の香りが漂っていた。

「大丈夫！ 大丈夫！ 付き合いたいだなんてそんな分不相応な望みは持っていないから！ 私はただ、遠くからレン様を見守りたいだけだから！ レン様は生きていてくれればそれで！」

「アンタねえ……」

「それにこのハンカチは返せないよ！ 私の生活に欠かせないものになってしまったのさ！」

ふふふ、と頬を熱くしながらハンカチを胸に抱く彩に、香帆は「どうなっても知らないからね……」と小さく零した。

そんな馬鹿話をしていると、給湯室にまで大きな声が響いた。

「一ノ瀬ー！ どこだー！」

「……アンタ、課長に呼ばれているわよ」

「え？ 今、昼休憩中だよ？ 私になにか……あつ！ そういえば今日は午後から営業先についていく約束で、早めに休憩を切り上げなきゃいけないんだ……」

肩を一瞬びくつかせてから、彩はうなだれながらそう言った。

今日行く営業先は、最近ようやくアポイントを取りつけた、日本を代表する高級ホテルチェーンである。

彩たちが勤めているのは、空調やLED、太陽光発電などの設備を扱う会社。先方には近々建設予定のホテルがあり、そこへの設備提案をしたいという話なのだ。

相手方の社長が直々に話を聞いてくれるらしく、忙しい相手に合わせて昼休憩の時間に会社を出る予定になっていた。

「……それにしても、課長ってアンタのこと気に入っているわよねえ。営業先に誰かを同行させるとなったら、いつもアンタをご指名じゃない」

彼女たちの上司、堀内廉は三十五歳にして営業課長に抜擢され、いわゆるエリート街

道を突っ走っている。

男らしい角ばった輪郭に、大きな体軀。短く切りそろえられた髪形も、いわゆる運動部といった感じである。

性格は気さくで、部下の相談にも嫌な顔一つせずに乗ってくれる、まさに理想の上司だ。

「私ってこんなんだから文句とか、注文とか言いやすいんだと思うよー」

「それだけかしら？」

「それ以上になにがあるのさー」

含みのある言い方をした香帆を意に介さず、彩はのんびりとそう返す。

「こら、一ノ瀬！ こんなところにいたのか！ いい加減出発しないと遅れるぞ！」

給湯室の扉から顔を覗かせて堀内がそう声を張った。

彩は「はい！ 今行きます！」と片手を上げる。

その瞬間、堀内の表情が少しだけ砕けた。

「早く準備しろよ！ 俺は会社の前に車をまわしておくからな！」

「ありがとうございます！ すぐ行きますね！」

「資料は？」

「ちゃんと準備しています！ 任せてください！」

彩が自信満々に自身の胸を叩くと、堀内はふっと噴き出した。

そうして、彩の頭をぼんぼんと、まるで子供にするかのように撫でてくれる。

「一ノ瀬の資料は見やすいからな。期待してるぞ」

そんな言葉を残して、堀内は給湯室を後にする。

彼を追うように彩も、寄りかかっていたシンクの縁から身体を起こした。

「それじゃ、行ってくるね！ ああ、でも、コーヒー淹れたばかりだった……」

「私がアンタの代わりに飲んどくわよ。ほら、早く行かないと！」

「ありがとうございます！」

元気いっぱいにならう言いながら、彩は駆け足で給湯室から出ていく。

そんな彩のうしろ姿を眺めながら香帆は「鈍感ねえ」と小さく零した。

それから一時間後、彩は営業先の社長室で、人生最大のピンチを迎えていた。

「社長の桑羽智也です。どうぞよろしくお願いします」

そう言って目の前で完璧スマイルを見せるのは、国内外の数多くのホテルを束ねる社長である。代々続く、由緒ある大企業の六代目。その経営手腕は最も優秀とされた初代に勝ると言われているほどだ。

そういうことに疎い彩でも、彼の名前ぐらいいは聞いたことがある。

「堀内です。よろしくお願いします」

にこやかに挨拶をする堀内の隣で、彩は固まったまま動けなくなっていた。顔から血の気が引きつつも、彼から目を逸らすことはできない。

なぜなら桑羽智也と名乗ったその男は、彩のストーカー被害者、『レン様』だったのである。

光に透けるようなサラサラの髪の毛も、高い鼻梁も、切れ長の優しい目元も見慣れたもの。間違えようがない。

ついでに彼からは、彩が拾ったハンカチと同じシトラス系の香りがした。

（レ、レ、レ、レン様はホテル王なの？ でもなんで？ あのマンション、割と普通のマンションだよな？ 私が住んでいるところよりは確かに家賃とか高いし、エントランスも豪華だけど、巨大企業の社長が住むようなマンションじゃないよね？）

まさかの出会いに小さく震える彩を、なにも知らない堀内が小さく小突く。

「こら、お前も挨拶！」

「あつ！ えつと、一ノ瀬彩です。よろしくお願ひします」

「はい、よろしくお願ひします」

にっこりと眩しいぐらいの笑みを見せながら桑羽は言う。その笑顔を浴びつつ、彩は必死で自分に言い聞かせた。

（うん。たぶん人違いだ。いつも観察してるリアルレン様に似ているけど、すっこく似

ているけど、この人はきつとドッペルゲンガーかなにかなんだ。きつとそう！ ……そういうことにしよう！）

心の平穩のために……

彩は密かに自分の腕をつねり上げ冷静さを取り戻し、自身が用意した資料と自社のパンフレットを桑羽に差し出す。

「こちらがわが社が紹介する商品と提案書です」

そう言った彩の頬には、冷や汗が伝っていた。

数時間後、彩は上機嫌で社長室を後にした。エントランスに向かう廊下を歩いているうちに、達成感が込み上げる。

桑羽へのプレゼンは思ったよりもうまくいった。

最初は緊張していた彩だったが、彼をドッペルゲンガーと思い込むことで徐々に落ち着きを取り戻し、いつものパフォーマンスをなんとか発揮することができた。

それを隣で聞いている堀内も、桑羽も満足そうだったので、結果は上々と見ていいだろう。

「あー、緊張したあ!!」

「お疲れさん。今日のプレゼンよかったぞ」

緊張の理由をプレゼンのせいだけだと思っっている堀内は、にこにここと機嫌よく笑いながら彼女の背中を優しく叩く。

そんな堀内に、彩はへにやりと疲れを前面に押し出したような笑みを向けた。

「そういうえば、昼休憩の時間に出てきたから昼食が後回しになってたな！ 今からなにか食いに行くか？ 今日俺がおごってやるぞ！」

「本当ですか？ それじゃ、焼き肉で！」

「……お前は少しぐらい遠慮しろ」

「えー、人のお金で食べる焼き肉は格別です！」

「焼き肉はまた今度連れてってやるから、今日は定食屋とかで我慢しとけ！ 俺はこの後、顔見せに行かなきゃいけないところがあるんだよ。煙の臭い付けて行くわけにはいかないからな」

呆れたような声だが、それを言う彼の表情はどこまでも優しい。なぜか嬉しそうにも見えるぐらいだ。

その時、堀内の胸ポケットから電子音が鳴り響いた。

「ん？ 電話だな。ちよつと先にロビー行っているぞ！」

営業先の廊下で堂々と会社からかかってきた電話を取るわけにもいかない堀内は、彼女を残して走り去る。

そして、堀内の背中が曲がり角の先に消えた直後、しっとりとした低音が彩の耳朶みみを打った。

「一ノ瀬さん」

まるで一人になるのを見計らったかのようにかけられた声に振り向くと、そこには嫻たおやかな笑みをたたえた桑羽が立っていた。

「そういうえば、君に言い忘れたことがありまして……」

「な、なんででしょうか？」

緊張で声が上がずる。

しかし、本来緊張する必要はないのだ。彼は彩のことを知らないはずだし、そもそも桑羽が本当にあの向かいのマンションの彼女なのかさえも定かではない。

そう考えていた彼女の想いは、彼が耳元でささやいた一言で木っ端みじんぼに粉碎される。

「今日は、いい写真が撮れましたか？」

その言葉に驚いて桑羽を見つめると、彼は昏い目を細めて黒く微笑んでいた。

「んで、ストーカーやめたの?」

「うん、もうさすがに怖くて!! いつ警察来るのかな? 私、引越したほうがいい? 今までの行動がバレてたとか、申し訳なさすぎるんですけど!!」

衝撃の出来事から一週間、彩は仕事終わりの居酒屋で、テーブルに突っ伏しながら香帆にそう吐き出した。いつから気づかれていたのか、気づかれているのは盗撮だけなのか。分からないことだらけだが、ストーカー行為の一端がバレていたのは間違いない。

「アンタにも申し訳ないって気持ちがあるのね……」

目の前で耐ハイを傾げる香帆は、それ見たことかという顔をしている。

「もう一週間でしょ? お情けで警察には通報しなかったんじゃないの?」

「そうなのかな? だとしたら、ありがたいんだけど……」

「だけど?」

「ここ二週間、レン様不足でつらいー!! あのアンニューイな寝起きの顔とか! コーヒーを飲んでいる時の優雅な仕草とか! シャワーを浴びた後の少し濡れた髪の毛とか!! 見たい! もう一度この目で拝みたい! 撮りためていた写真を見ればレン様パ

ワーをチャージできると思ってたけど無理だった! 苦しい! 死んじやいそう!! 誰か! 誰か私に癒しをっ!!」

「アンタ、まだそんなこと言ってるの? というか、これに懲りて写真も捨てなさいよ……」

頬を引きつけて、香帆は呆れたようにそう零した。

あわや警察沙汰というところまできているにもかかわらず、暢気なものである。

彩はいまだに頭を抱えていやいやと横に振り、香帆は料理が零れないように慣れた様子で彼女のそばから皿をどかしていく。

「写真まで捨てたら死んじやう自信がある! あれほど精巧な三次元レン様を私ほ他に知らないもの! あの写真はうちの家宝にする予定です!!」

「ワー、キモチワルイ」

「気持ち悪くてもいいもん!!」

テーブルに頭を打ち付けそうな勢いで彩は突っ伏した。

お酒の力も借りて、普段からおかしな人間が余計におかしくなっている。

「そんなに落ち込まないの。常に面白おかしく生きているのがアンタのいいところでしょう?」

香帆は枝豆を口に運びながら、どうでもよさそうに声を出した。

「つてか、世間って狭いのね。たまたまストーリーカーしていた相手が、営業先の社長とかすごい偶然じゃない？ ……で、どうなのよ？ 実際にはレン様に会った感想は？」

「もう最高にレン様だった！ めっちゃかつこよかったし、ハンカチと同じシトラスのいい香りがした!! ……だけど、なんか想像してた感じの雰囲気じゃなかったんだよねー」

『今日は、いい写真が撮れましたか？』

そう言った彼の鈍く妖しい輝きを放つ瞳を思い出し、彩はぶるりと身体を震わせた。底なし沼のような黒い瞳だけは、彼女の想像していたレン様像とはかけ離れていた。

「雰囲気？」

「いや、気のせいかもしれないけどねー」

自分の中の違和感の正体が掴めない彩は、困ったように笑った。

「でもさー、なんでレンさ……じゃなかった桑羽社長は、あんな庶民的なマンションに住んでいるんだろう。普通、社長って大きな一軒家に住んでいて、巨大で怖そうな犬とか飼って、外車に乗ったりするんじゃないの？」

「アンタ、社長ってものに対してすごい偏見を持つてるのね。別に社長って言ったってみんながみんなそういうわけじゃないでしょう？ それに、桑羽ホテル&リゾートの会長は身内の教育に厳しいって有名みたいだし」

「そーなの？」

きょとんとした顔で目を瞬かせる彩に、香帆は一つ頷いてみせる。

「まあ、私もテレビで観ただけなんだけどね。大学費用は自分で工面しろ！ 大学を出たら親からの援助は期待するな！ 会社には入れてやるが、他の新入社員と同じ扱いだ！ 誰よりも実績を上げろ！ ……って感じの怖い爺さんだったわよ。なんか去年ぐらいに亡くなって、今は新しい会長さんらしいんだけどね。でも、教育方針は一緒みたいよ？ 期待に応えられないと、たとえ子供だろうが後は継がせないって話だし。現に今の社長って長男を差し置いて次男じゃなかった？」

「ほー……」

思わずまぬけな声が出てしまう彩である。

そんな彩に構わず、香帆は言葉が続けた。

「一般的なマンションなのも、電車通勤なのも、そういう教育方針で育ったからなんじゃない？」

「へえー。レン様って、そんな過酷な環境下で社長になった人だったのかあ」

熱を上げていた相手が想像以上の大物だったと知り、彩は少し呆れた。

高嶺の花、雲の上の人、別世界の住人、といった感じである。

「はあ。そんな雲の上の人なら、話しかけられた時にツーショットだけでも頼めばよかつ

たなあ……。いやもう、あの言葉言われた瞬間は血の気が失せてそれどころじゃなかったんだけど、今考えれば惜しいことしたよねー。あれだけ精巧なレン様、もう二度とお目にかかれないかもしれないのにつ!!」

「アンタさ、さつきから桑羽社長にもう会わない前提で話しているけど、今週末また行かないといけないんじゃないかなかった? うちに任せてくれるかどうかの返事を聞きに」

その言葉に彩はガバツと顔を上げる。

一気に血の気が引いていき、顔が強張る。

「……そーだった……」

「あ、マジで忘れていたのね」

「あーもー! どうしよう! 行ったらきつと、おまわりさんが待っているんだ! それか弁護士さん!」

焦ったり、熱くなったり、呆けたり、また焦ったり。あの一件以来、彩に安息の時間はない。

「いーじゃない。次、会う時に頼んで撮ってもらったら? ツーショット」

「いや、一人で壁際に立たされて、囚人よろしくマグショット撮られちゃうよお!!」

「……日本にその制度はないわよ」

「香帆ちゃん、次の訪問同行代わって! お願いだからあ!!」

縋りついた彩の腕を、香帆は面倒くさそうに振りほどく。

「嫌よ。アンタの自業自得なんだから、私を巻き込まないでちょうだい。それに、堀内課長だつていきなり相方変わったらがっかりするわよ」

「え、がっかり? びっくりじゃなくて?」

「そ、がっかり」

その言葉に彩は首をひねり、香帆はため息を一つ零すのであった。



彩が香帆と酒を飲み、むせび泣いたその週の金曜日。彩と堀内はふたたび桑羽に会いに来ていた。

「堀内さん、一ノ瀬さん、お待ちしていました」

先週と同じ柔らかな態度で、桑羽は二人に微笑みかけた。

彩は堀内のうしろに隠れながら、愛想笑いする。

小刻みに震えているのを、またもや緊張のせいだと勘違いした様子の堀内は、彼女にそつと耳打ちをした。

「おい、大丈夫か?」

「だ、大丈夫じゃないかもしれません。堀内課長、この後おそらく警察がどつとなだれ込んできますが、驚かないでくださいね。『不甲斐ない娘ですみません』。そう母に伝えてもらえますか?」

「意味が分からん。本当に大丈夫か、いちの……」

「先日の提案なのですが、社内の会議にかけましたところ二つほど要望が上がりまして……」

まるで二人の会話を強制終了させるかの如く、桑羽がその言葉を発した。

彼の目は先ほどと変わらず優しげに細められているが、その奥の色がどうにも澱んでいるように見える。

彩は思わず身をすくめた。

(や、やばい! 無駄話してたから怒らせた?)

しかし、彩の心配は杞憂だったようで、桑羽は変わらない口調で淡々と話を進めている。彩はその様子に、ほっと胸を撫で下ろした。

——きっと、彼は彩の色々な迷惑行為を水に流してくれたのだろう。

彼の態度を勝手にそう解釈して、焦る気持ちの片隅で興奮している自分がいた。一つのこと熱中すると周りが見えなくなる、つくづく厄介な性格である。

(懐の深いレン様、尊い!)

そうこうしている間に打ち合わせが終わり、後は挨拶を済ませて帰るだけになった。扉に向かって歩き出そうと背中を向けた彩に、桑羽はどこまでも優しい声をかけた。

「一ノ瀬さん、よかつたらこれをどうぞ」

そう言って彼は自社ホテルのパンフレットを彩に渡してきた。

「最近、このホテルを改装しましてね。女子会向けの部屋をいくつか作ってみました。よかつたらお友達と泊まりに来てください。サービしますから」

虫も殺さぬ顔。その言葉がびったりとあてはまりそうな柔和な表情で、桑羽はそう言った。

そのパンフレットを受け取りながら、彩は胸を詰まらせる。

(レン様! いや、桑羽社長! めっちゃいい人!!)

次からは実務担当に業務を引き継ぐので、彩が桑羽に会うのはきっとこれが最後になるだろう。

致し方なくストーカーもやめてしまった今、彩と彼の接点はこれでもうなくなってしまう。

「絶対行かせてもらいますね!」

彩は少し感じた寂しさを吹き飛ばすように、そう元気よく返事をした。

堀内が運転する社用車の助手席で、彩はうっとり桑羽からもらったパンフレットを見つめていた。パンフレットといっても二、三ページの薄いものではなく、二十ページ以上はありそうな厚手の冊子だ。表紙は箔押しで、相当お金がかかっていそうである。そこにはホテルの居室情報はもちろんのこと、サービス内容、ホテルの中にあるシヨップや食事処等の情報が、所狭しと書いてあった。

見ているだけで、まるでそのホテルに泊まったかのような充実感を味わえる一冊だ。「あんまり集中して読んでいると、酔うぞー」

「結構写真が多いんで大丈夫です。それにしても、すつごく豪華なホテルですよ……。わ、このスイートルームなんて一泊二十万？　泊まってみたいけど、これはちよつと無理だなあ……」

その冊子には桑羽が言っていたように『女子会をするための特別室』なるものも載っている。しかし、彩はその部屋よりも白と黒を基調とした高級感溢れるスイートルームの写真に目を奪われていた。シャワーはガラス張りだし、ベッドなんて見たことがない大きさである。

「このベッドで寝たら、気持ちよすぎて起き上がれなくなりそう！　うわ、この部屋グランドピアノまで置いてある！　スイートルームともなれば、頼んだら誰か弾きに来てくれるのかなあ……」

「へえ、そんなにすごいのか」

「すごいですよー！　次の信号のところで見せますね！」

運転中の堀内にそう声をかけ、彩は次のページを捲る。

その瞬間、思考が完全に停止した。

そのページはレストランを紹介していたのだが、写真の隣に黄色い付箋が貼られているのだ。

そして、その付箋にはこう書かれていた。

『今晚、九時にこちらでお待ちしています。』

もし、逃げようとした場合にはこちらにも考えがありますので、あしからず。　桑羽

その明確な脅しに彩は息を呑み、一気に血の気が引いた。

「一ノ瀬、どうかしたのか？」

彩の様子に気づいた堀内がそう声をかけてくる。

彩は慌てて付箋をはぎ取ると、首をこれでもかというほど横に振って、ひっくり返ったような声を出した。

「な、な、なんでもないです！　お気になさらず運転に集中してくださいませです！」

「……なんでそんな喋り方なんだ」
堀内のその問いに彩は乾いた笑いを漏らすことしかできなかった。



「食事、気に入りませんか？」

「い、いえ。とても美味しゅうございます」

にっこりと微笑む桑羽に、強張る彩。

ホテルの最上階にあるレストランで、二人は向かい合って食事をとっていた。

といつても、手を動かしているのは桑羽のみで、彩はナイフとフォークを握りしめて固まっているだけだ。

二人の真横にある大きな窓からは、まばゆいばかりの夜景が見渡せる。しかし、夜景など見る余裕がない彩は目の前の桑羽をじっと見つめたまま、窺うような声を出した。

「あ、あの、一つお聞きしてもいいですか？」

「はい。なんででしょうか？」

「桑羽社長はなんで……」

「『社長』なんて堅苦しい呼び方はやめてください。今は『社長』としてお会いしてい

るわけではありませんから」

桑羽はワインを傾けながらにっこりとそう言った。

「じゃあ、桑羽さん。なんで私を食事に……？」

どこからか警察や弁護士が飛び出てくるんじゃないかと警戒している彩は、周りを見よるきよると見ながら尋ねた。

しかし、そんな彩の行動を裏切り、桑羽はあっさりと答える。

「一度、貴女と一緒に食事をしてみたいと思っただけです。他意はありません」

（う、うっそだあ……）

彩は引きつった口元を手で覆いながら、身を震わせた。

『もし、逃げようとした場合にはこちらにも考えがありますので、あしからず』

そんな脅しの文句が書かれた付箋は今もポケットの中で眠っている。

（『考え』ってなんだろ、う……。もういつそのこと、怒鳴られたり詰め寄られたりした

ほうが楽かも……）

真綿で首を絞められるような気分を味わいながら、彩は恐々と桑羽を眺める。

彼は指の先、いや爪の先端に至るまで、一分の隙もない洗練された動きで食事をとっている。一つ一つの仕草に特別な意味があるようなその動きを見ながら、彩はいつの間にかうつと息を吐き出してしまっていた。

「……私も貴女に質問してもいいですか？」

「は、はい。なんででしょうか？」

「ほーっと彼の仕草を見ていた彩は肩を跳ね上げて、弾かれるようにそう答えた。

「もう私の後をつけたりしないんですか？　ここ何日間か、部屋を覗いてもいないようですし……」

その言葉に彩は固まった。額から、背中から、冷や汗が噴き出てきてどうしようもない。（やばいこれは確実に訴えられるパターンのやつだ！）

彩はちぎれんばかりに首を横に振った。それはもう必死の形相で。

「もう後をつけません！　絶対にしません！　金輪際近づきませんし、なんなら引越しを考えているぐらいで！　本当に申し訳……」

言い終わる前に、彩のグラスになみなみとワインが注がれる。それを注いだのは目の前に座る桑羽だった。柔和な笑顔を顔に張り付けているが、雰囲気はどこか恐ろしい。

どろりと濁った瞳の色は、堀内との会話を止めてきた時のそれと同じだった。

背筋に冷や汗が伝う。自分の本能が『この男はやばい』と警鐘を鳴らす。

彩は慌てて立ち上がった。

「あの、私もう……」

「もしかして、俺の注いだお酒は飲めませんか？」

声色は甘ったるいのに、その表情は恐怖心を駆り立てた。一人称も、『私』から『俺』に変わっている。

蛇に睨まれた蛙のような心境で、彩はこれでもかと首を横に振った。

「飲みます！　飲ませていただきます！　そりゃあ、もう!!」

お酒に強いわけではないし、空きっ腹に酒を流し込めばどうなるかぐらいは理解していたつもりだけれど、彩にはそのお酒を断るといふ選択肢は残されていなかった。

土砂降りの雨のような水音で彩は目を覚ました。寝ぼけ眼で見上げる先には知らない天井。首を傾ければ、自分が横になっているベッドが確認できた。

真っ白いシーツは肌触りがよく、ふかふかのマットレスは身体を優しく包む。さらに、絶え間なく耳朶を打つ水音が心地よくて彩を二度寝へと誘惑する。

（いやいや！　二度寝してる場合じゃない!!　……ここどこ?）

なげなしの理性で誘惑を跳ね返した彩は、ベッドからゆっくりと起き上がった。

頭がまだくらくらするし、正気を保っているとは言いがたい状況だったが、必死で目を擦り、状況を確かめていく。

（なんか、どっかで見たことがある部屋だな。どこだっけ。あのグランドピアノ、どこで見たんだっけ……）

彩は開け放たれた扉の先の部屋に見えるグラントピアノを眺める。
 ダークブラウンの床に、シックな濃紺の壁紙、オレンジ色の暖かなルームランプが
 灯ともっている。

カーテンは閉まっているけれど、その隙間から満天の星が望める。

「そもそも私って、寝る前になにしていたんだっけ……？」

そうつぶやいた時、あんなにしていた水音がしなくなっていることにふと気がついた。
 そもそもカーテンの隙間から覗のぞく空からは雨は降っていない。

なんの音だったのかと、彩が顔を部屋の奥のほうに向けた時、ちょうど視線の先にあ
 る扉が開いた。

「ああ、起きていましたか？」

その言葉とともに寝室の室内灯がつけられる。

「……なんで……」

彩が思わずそう零こぼしてしまったのも無理はない。

そこには彼女の愛してやまないレン様が、上半身裸で首にタオルをかけた姿で立っ
 いたのだ。

髪の毛は濡れて、ところどころ束になっている。

(やばい。めっちゃ尊い——!!)

「少し飲ませすぎましたね。大丈夫ですか？」

『水も滴たるいい男』の代表のような姿でベッドの脇に腰かけたレン様は、いつもハンカ
 チで親しんでいるシトラス系ではなく石鹸せっけんの香りがした。

(なんだかいつもと違う匂い……ん？ ……いつもと違う?)

そこではたと思考が止まる。目の前にいる人は誰だ？

レン様は——そもそも本物のレン様は二次元の人物だ。彼の匂いなんて分からない。
 そして、彩がストーキングしていた三次元レン様は桑羽社長である。桑羽社長とは仕事
 で二度ほど顔を合わせただけで、シャワー後の姿を拝むような間柄ではない。

なら、目の前で微笑む彼は誰だろうか……

三次元レン様、もとい桑羽社長のドッペルゲンガー……いや、これほど見目麗みめうるわしい男
 性が、そうたくさんいるはずない。

彩は意を決し、自分が思い当たる中で一番可能性の高そうな人物の名前をつぶやいた。

「……桑羽……社長？」

確かめるようにそう言葉を吐いたところ、彼は片眉を上げて首を傾かしげる。

「どうかしましたか？ 俺が誰だか分かりませんか？」

「……いや、やっぱりそうですか。すみません」

見れば見るほどレン様と瓜二つの容姿に見惚みとれながら、彩は深々と頭を下げた。

この状況を見るに、おそらく飲みすぎて寝てしまった自分を桑羽が手ずから介抱してくれたのだろう。それしかありえない。

彩は頭の中でそう結論づけた。

(……で、ここはあの冊子に載っていたスイートルームだ)

一泊二十万円。その数字が頭を駆け巡り、思わず身体がぐらついた。

ここの宿泊料金を払えと言われたら、なけなしの貯金を切り崩さないといけない。

血の気が引いた彩に、桑羽は優しい声を出す。

「気分をよくして少し判断力を鈍らせるだけのつもりだったんですが、まさか眠らせてしまうとは……こちらこそ、すみませんでした」

「……ん？」

(今なんて?)

判断力を鈍らせるつもりだった。

その衝撃の一言に、彩は笑顔を顔に張り付けたまま首をひねった。

聞き間違いだろうか?　とも思ったのだが、聞き間違えるようなちよっどいい言葉も思いつかない。

とりあえず先ほどの言葉は一日置いておいて、彩は少しずつ現在の状況を確認していく。

ホテルで男女が二人きり。

さらに、ベッド脇の色男はシャワー済みである。

(これは……なんというか、ちよつとエッチな漫画でよく見るシチュ……!)

という、オタク的な妄想を今はしている場合ではない。

彼は眠りかけてしまった彩を仕方なくここへ運び込んでくれただけ、というオチだろう。とはいえ、この状況は誤解されかねない。自身の経営するホテルでこんなことをしている場面を従業員に見られでもしたら、彼に悪評が立つ可能性もある。

桑羽的にはよかれと思つてやったことかもしれないが、これは『酔った女をお持ち帰り』に見えなくもない状況だ。

(もう遅いかもしれないけど、早くここから出たほうがいいよね。こんなによくしてもらったのに、誤解されたら悪いし……)

「あの、私もう帰りますね。介抱までさせてしまつて本当にすみま……!」

「逃げるんですか?」

これ以上、迷惑をかける前に……。そう思つて彩は立ち上がったのだが、桑羽はそんな彼女の腕を引き、無理やりベッドに座らせた。

そして、彩の前に立つと、彼女を見下ろしながら昏い目をわずかに細めた。

「逃がしませんよ」

『逃がしませんよ』? や、やっぱり盗撮とか色々していたこと、めっちゃ怒ってるんだ。そ、それはそうだよ、ここは誠心誠意謝らないと……っ!』

彩はベッドの上に慌てて正座し、勢いよく土下座をした。

「あ、あの、ほんと盗撮とか、追いかけていたのはすみませんでした! つい、出来心というか……、桑羽さんがあまりにもレン様にそっくりだったもので……」

「レン様?」

一オクターブ低くなった声に彩は、上げかけていた頭を布団にめり込ませた。室温は適温に保たれているはずなのに、目の前の彼からは鳥肌が立ってしまうような冷気が漂ってくる。

「いやいやいや! こっちの話です! どうもすみませんでした!!」

(さらに怒らせちゃったよお! 怖い! 怖すぎるっ!)

「……つまり君は俺とその『レン様』とやらを重ねていたということですか?」

確かめるようなゆつくりとした口調で尋ねてきた桑羽に、彩はまぬけな声で答える。

「はい。まあ……」

少しだけ顔を上げると、冷たい表情で桑羽がこちらを見下ろしていた。もうその口元に笑みは浮かんでいない。

「で、そのレン様とかいう、どこの馬の骨とも知れないコバエのような存在と付き合う

ことになってもなったので、俺は用済みということですか? そうですよ。もう一週間以上姿を見せてくれませんでしたもんね」

(んんん? 馬の骨? コバエ? 用済み?)

よく分からない単語の羅列に、彩は固まったまま動けなくなる。理解できているのは、彼が怒っているということだけ。

しかも、彩のストーカー行為に対して怒っているのではなさそうだ。

桑羽は先ほどまでの優しい笑みを完全に収めてしまっていて、氷のような冷たい微笑を顔に張り付けていた。

「……ああ、それとも、実際に会ってみたら想像と違って、もう俺に興味がなくなりましたか? そのレン様とやらに俺の話し方や雰囲気似てなかったから、だから君は……」

「ちよ、ちょっと、待ってください! 桑羽さんはレン様に激似です! それは保証します!」

早口でまくしたて始めた桑羽に、彩は顔を上げて斜め上のフォローを入れる。

しかし桑羽の勢いは止まらないようで、彩に低く唸るような声を落とした。

「じゃあ、そのどこの馬の骨とも知れないコバエのような男と、やっぱり交際を……」

「それも違いますっ!」

なんでそこで怒るのかよく分からないまま、彩は視線を巡らせながら言葉を選ぶ。「なんというか、レン様と付き合うとかそういうのはできなくて、ですね……。レン様は葉ちゃんのことを一生好きというか、そこに私の入り込む隙はない、みたいな話でもそも、まず次元が違うというか……」

「よく分かりませんが、つまり、君の恋は叶わないということですか？」

先ほどよりは優しくなった声色で、目の前の桑羽はそう聞いてくる。

彩は少しだけ考えた後、「……まあ、そういうことですね」とだけ返した。

その瞬間、明らかに桑羽がまどついている空気が変わった。

「……それはよかったです。君に想い人がいるのは大変腹立たいですが、俺に付け入る隙があるということなら、まあ、よしとしましょう」

「よし？」

なにがどうして『よし』になるのか分からない。

彩が小首を傾げていると、桑羽は爽やかで穏やかな笑みを見せた。

「それに、相手を排除しなくて済みました」

「排除？」

日常生活ではまず使うことのない単語に彩はひっくり返ったような声を出す。顔は穏やかだが、言っていることは物騒だ。

思わず身体を引いた彼女を安心させるように、桑羽はゆったりと微笑んだ。

「冗談——」

「ですよー」

「では、ありませんよ？」

耳元でささやかれたその言葉に、思わず身体が跳ねる。

のけぞるようにうしろに手をついた彩の真横に、桑羽も手をついた。そして、鼻先がくっつくほどの至近距離まで顔を近づけてくる。

その顔は色香に満ち溢れれていた。

「君に近づく男は誰であろうと排除するつもりですよ。それだけの人脈も財力もあると自負しています。究極の話ですが、この世界に俺と君の二人だけしかいなくなったら、君は俺を選ばざるをえないでしょう？」

冷たさの中に狂気が混じった声を聞きながら、彩はごくりと喉を鳴らした。

冷や汗を滲ませる彩の輪郭に、桑羽は自身の骨はった指をそっと這わせる。

「本当にすべての男を消そうとは思っていませんよ？ けれど、それぐらいの気持ちだっことは理解しておいてください。俺は君と一緒にいるためなら人の一人や二人は躊躇いもなく消してみせます」

その消すという単語が『社会的に』なのか、『物理的に』なのかは分からない。けれど、

本気になった彼はどちらでもやってしまいそうな、そんな雰囲気にも包まれていた。

桑羽は輪郭を撫でていた指で彩の唇を触る。

「あ、あの……」

「もう当然、気づいていると思いますが、俺はどうしても君が欲しいんです」

「欲しい……?」

「そう、君が欲しいんです。突然でびっくりしたと思いますが、俺は本気で君が欲しい」
内臓を焦がすような低音が、耳に触れるか触れないかというところでじつとりと響いた。

その声に彩は身をすくめ、少し身体を引いてしまう。

彼がなにを言いたいのか、本気で分からない。

「逃れようとしたってダメですよ。今日、俺は多少強引な方法を使っても君を手に入
れと決めているんです」

その言葉に彩は頬を熱くしながら首をひねった。

漫画の中のレン様は、正面から飛び掛かってくる肉食獣を思わせるが、目の前の彼は
知略を巡らせて忍び寄り、食らいついたら離さない蛇のようだ。なんというか、自分に
対する強い執着のようなものを感じる。とはいえ、彼に執着される理由に思い当たる節
はない。

(いったいどうして……)

その時、彩の頭の豆電球が光る。そうして、ポンツと手を叩いた。

「欲しいとか、手に入るとかって、それってもしかして……」

「はい、君の……」

「もしかして、……私のお金?」

「いりません」

目の前でぴしゃりとそうツッコまれ、彩はますます疑問符を頭に浮かべた。

桑羽は色香に満ちた笑みをスツと収め、まるでダメな子を見るような視線を彩に投げ
かける。

「……本気で分からないんですか?」

「すみません。とりあえず、後をつけまわしていた詫びを入れろってことですよね?

だからお金を……」

「違います」

桑羽の言葉に彩はさらに眉根を寄せた。『マジで?』という思いを込めて。

彩のその顔を見た瞬間、目の前の桑羽がふつと微笑んだ。

「君は俺の想像の上をいく人ですね。自由奔放で、自分に正直で……。一緒にいて、本
当に飽きない」

困ったように微笑むその顔にとどきりとした。こんな大人の男性を捕まえてどうかと思うのだが、『可愛い』なんて感想が湧いてきてしまう。

彩が彼に見惚れたまま口を半開きにしてしていると、彼はさらに接近してくる。すると、一層強く色香が滲む。

「ますます欲しくなりました」

「……お、お金？」

「だから違いますよ。君自身が欲しいんです」

「へ？ 私自身？ はっ！ それは、私を警察に突き出すっていう……」

「……かなりはつきり言わないと、君には伝わらないようですね」

呆れたような口調の後、彩の目の前に桑羽の顔が迫る。

「抱かせてください、と言っているんです」

「は？ だく？」

「セックスさせてください」

「セッ……！！」

さすがに意味が分かり、ひっくり返った声を出した後、彩は固まった。

そうして、みるみるうちに頬を熱くする。

「最初から心まで手に入れられるとは思っていませんよ？ なので、まずは身体から俺

に落ちてください」

そう言って、桑羽は彩の肩を押しした。

すると、彩の身体はいとも簡単に白いシートに沈む。

見上げる先には半裸の色男。

落ちてきた髪の毛が顔に影を落とし、それがとてつもなく色つばい。

「もちろん、心もいずれ手に入れますけどね」

(レ、レ、レン様がこんな間近に！ というか抱くって……って、もしかして、身体で落とす前付けるとか、そういうこと?)

貞操の危機にもかかわらず、彩の頭の中は混乱を通り越してお祭り騒ぎだった。

憧れのレン様の顔が至近距離にあること。そして突然、わが身に人生初の恋愛イベン

トが起きたこと。

知り合って間もない男性に押し倒されている状況だが、不思議と恐怖心はなかった。

彼とは、容姿だけなら一方的に遠くから眺め続けてきた歴史がある。

それに、恋や、こういう行為に対するほのかな憧れもあった。年齢も年齢なので早いところ処女を卒業したいと思っていたくらいだ。

加えてなにより、目の前の彼の自分を見る目が優しいから……物騒な台詞や鋭い視線はちよつと怖いけれど、激しく抵抗する気持ちはなかった。

そう考えるとたまらなくて、彩は不思議な幸福感に包まれる。

(まるで、レン様に想いを寄せられている葉ちゃんみたい……！)

暴れまわる心臓が出てこないように、彩は口元に手をやる。

そんな彩を見下ろしながら、桑羽はふっと小さく笑った。

「なにも怖がることはないですよ。君は俺に身を任せてくれれば大丈夫ですから。君は俺の容姿が気に入っているのでしょうか？ 顔でもどこでも眺めていてください。大丈夫です。丁寧に、大事に抱きますから、君は感じているだけで……」

その言葉とともに桑羽の顔が彩の首筋に埋まる。

その瞬間、彩の身体が跳ねた。

「ひゃっ……」

「いい声ですね」

湿っぽく響いた低音に、彩はさらに顔を熱くした。

しかし同時に思考をフル回転させる。

(ちよ、ちよっと待って！ なにこの美味しすぎる状況？ 夢？ 夢なのかな？ ……つていうか、今日の下着どんなのだったけ？ 上下揃ってた？ 色は何色だった？ というか、そもそもレン様にこんな貧相な身体を見せてもいいのか？)

口元から自身の胸に手のひらをスライドさせながら、彩は顔を強張らせた。お世辞に

も大きいとは言いがたい胸である。

「あ、あの、ちよっとっ！」

彩は焦ってそう口にしなが、両手で思いつきり目の前の彼を押す。しかし、そんな抵抗など構わず、桑羽は彩の両手をいとも簡単にシーツに縫い付けた。

そして、自分の肩にかかっているタオルを、器用に彼女の首に巻き付け始める。

「今更抵抗しても遅いですよ」

「いやいや、これは抵抗ではなくてですね!!」

彼は彩の腕を括ったタオルを手際よくベッドヘッドの柱に結び付ける。そして、彩に跨った状態でニヤリと口の端を上げた。

「あまり抵抗すると痛くしますからね」

そう言うや否や、すると桑羽の指先が彩のシャツの隙間に侵入してくる。片手で器用にボタンを外し、指先一つで彩のブラジャーを上にならした。すると、小さな赤い突起が二つ飛び出してくる。

「ああっ！ ちよっ！ で、電気消してください！ あと、せめてお風呂に入りたい！ お酒たくさん飲んだし！ 汗かいてるし!!」

彩が叫ぶと、彼は目を細めて黒い笑みを浮かべた。

「ダメです」

「なっ!!」

「電気を消したら君のよがる姿が見えないですし、シャワーを浴びているフリをして逃げられたら困りますからね」

「まあ、逃げたところでまた捕まえますけど」と笑う桑羽を見ながら、彩は両手を思いっきり引つ張った。しかし、タオルは外れるどころか彼女の手首をきつく締めつけるばかりだ。

「それに、貴女の香りが薄れてしまったらと思うと、もったいなくて……」

彼女の耳のうしろに顔を寄せながら桑羽は喉の奥で笑う。

その様子に彩は羞恥で瞳を潤ませた。

「——っ！へ、変態!!」

完全に自分を柵に上げた一言である。

しかし、桑羽はたいして気に留めていないようで、必死に身をよじる彩を見下ろしながら楽しそうだ。

「そうですね。なんだか、君のせいで新たな性癖に目覚めそうです。加虐心をそそられる、とでもいうのでしょうか」

彼はそう言いながら、恍惚とした表情を浮かべている。

仕事で最初に出会った時とは、もうほとんど別人だ。

彼は彩の赤い先端を指で弾いてきた。その刺激に彩の身体は跳ねる。

「ひゃっ!」

「感度がいいようですね。いいことです」

手のひらで円を描くように彩の小さな突起を弄び、そしてやわやわと胸を揉んでいく。「んっんっ」

ピリピリと走る電気のような刺激に、彩は目をつむって耐える。

すると、險に桑羽がキスを落としてきた。

「怖がることはないと言ったでしょう？ 過去に君を抱いたどの男よりも気持ちよくしてあげますから、そんなに固くならないでください」

「そんなの無理……っ」

どの男よりも、つて前例がないのだから不可能だ。身体の感度の良し悪しだって、よく分からない。そう説明しようとしたけれど、言わせてもらえなかった。

彼はこれ以上、彩の話は聞きたくないとかかりに胸の突起への刺激を一際強くする。

「俺なしじゃ生きられない身体に作り変えるのが、当面の目標ですからね」

恐ろしいことを平気で言う男である。

会話している間にも桑羽の手は、やわやわと彩の身体を撫でる。

腰のあたりを触れるか触れないかの力で撫でられて、彩の身体は簡単に跳ねてしまう。

「でも、俺も別に君を無理やり抱きたいわけじゃないんです。それだと強姦になってしまおうでしょう？　そういう虚しい行為は最終手段にしか使いません」

背中手に手をまわしながら桑羽はそうささやく。手首を拘束している時点で無理やりな行為だと思っただが、彼の理屈では違うらしい。

「だから、今回はいちいち承諾を得ることにします」

「承諾？」

「ええ、ダメと言われたらその行為はしませんから、安心してください」

安心させるようにそう言いながらも、もうその手は彩の乳首を摘まみ上げている。抓ったり、引っ掻いたりしながら彩に快感を植え付けていく。

「あ、ああつ、や……」

「それでは、キスをしませんか？　互いの舌を吸い合つて、唾液を絡ませるようなキスを」

先ほどまで胸を触っていた親指を、今度は彩の口腔に侵入させる。そうして無理やり口を開かせ、彩の小さな舌を優しく引っ張った。

「こんな感じですか。舌同士でしたら、もっと気持ちいいですよ？　どうですか？　気持ちいいこと、したいでしょう？」

その言葉に彩の下半身がぎゅっと収縮する。そうして気がつけば、彩はコクンと一つ頷いてしまっていた。

立ち読みサンプル はここまで

「いい子ですね」

「んっ、んんっ!!」

桑羽の綺麗な顔が間近に迫る。

唇が触れたと思ったら、いきなり舌が口腔内に侵入してきた。桑羽のぶ厚い舌は彩の小さな舌を丁寧に揉みしだいて、柔らかくしていく。

誘われるがままに桑羽の口腔に舌を入れると、途端に捕まり、宣言通りにじゅる、じゅる、といやらしい音を立てて舌を吸われてしまった。

「ん、んあ、んっ」

舌の根が引っ張られて苦しいのに、それでも桑羽はやめてくれない。

何度舌を引っ張り戻そうとしても無理だった。

結局、舌の感覚が鈍くなるまで入念に味わわれてから、ようやく解放された。

「次はどうしましょうか？」

肩で息をする彩を桑羽はまるで捕食者のように見つめる。

唾液のついた唇を親指で拭いながら、彼はなにかを思いついた様子で口の端を上げた。

「それなら、次はここを舐めてもいいですか？　小さく尖ったこの可愛らしい実を口に含んで歯を立てても？」

桑羽が言っているのは、もちろん乳首のことだ。